

研究・活動紹介

しきじ 磐田市敷地（旧豊岡村内）の民俗調査

中山 正典（静岡県立農林環境専門職大学 生産環境経営学部）

江戸時代、豊田郡には「敷地村」は2つあった。内山真龍著の『遠江国風土記伝』（寛政11(1799)年刊)にも豊田郡の中で、「南部の宿村」に一つあり、「野部郷」にも一つあると記している。前者の敷地村は掛塚輪中の一村で、明治22(1889)年の町村制で豊岡村(掛塚輪中内にあり、この村は明治29年に掛塚町に統合されている。)に統合されていて、『静岡県地名辞典』によると「しきちむら」と音読みしたようである(ただ現在は字名として掛塚では「しきじ」と読むのが一般的)。後者の敷地村は野部郷の一村で明治22年に近世村落の敷地村、家田村、大当所村、岩室村、大平村、虫生村、万瀬村の7ヵ村が統合して「敷地村」となったものである。明治24年当時、戸数229戸、人口1,289人、の規模であった。その後、昭和30(1955)年に敷地村、野部村、広瀬村の3ヵ村が豊岡村に統合した。なお、この豊岡村は平成17年に磐田市に編入合併している。

今回民俗調査の対象としたのは、この後者の「旧豊岡村敷地」である。明治22年から昭和30年まで67年間、存在した村であった。ちなみにこの間、掛塚輪中に「敷地村」は村として存在していない。静岡県立農林環境専門職大学では遠州常民文化談話会の協力を得て、この敷地地区の民俗調査を令和2・3年度に実施する。令和2年8月22日(敷南、敷上地区)と、8月29日(大平南、大平北、虫生、万瀬)に合同調査会を開催し、敷地地区の30名以上の住民の方が豊岡東交流センターに来ていただき、調査打ち合わせをすることができた。専門職大学より教員2名、学生2名が参加(コロナ過のため最少人数に限定した。)した。

この調査対象区「敷地村」は『磐田郡誌』(大正10年)では以下のように記されている。「本村は磐田郡の中央に位し、見付町を距ること北方約4里なり。地勢東西北の三方山を以て圍繞せられ、北部は一帯山地をなす。敷地川は源を東北部に聳ゆる本宮山に発し、山間を迂回し、本村の中央を南

流して三川村に入る。南部流域には稍開けたる平野あり。村民多くは農業に従事す。従来交通不便なりしが、明治36年山梨・二俣間県道開通し、本村を貫通し、又日露戦役当時より北部村道改良せられ、稍其の面目を改めたり。本村は見付、森町、二俣町の要衝に当るを以て、交通の便は将来益發達を見んとす。明治22年2月26日を以て、元敷地・家田・大当所・岩室・大平・虫生・万瀬の七字を合併して、一自治区となし、敷地と命名す。

本村の沿革概要を記すれば、元亀天正の頃野部地方より分離して、独立せし者の如し。明治5年大小区の制により、42小区となれり。第42小区管轄区域次の如し。

万瀬村、虫生村、大平村、岩室村、敷地村、大当所村、上野部村、下野部村、合代島村、社山村、上神増村、神増村、下神増村、三家村、松ノ木島村、壱貫地村、山田村、米倉村、以上十九ヵ村。明治12年大小区の制を廃し、行政組織の改正あり。敷地・家田・大当所の三ヵ村を一組合役場となし、岩室、大平、虫生、万瀬の四ヵ村を以て、一組合役場とせらる。明治17年7月1日の改正により、山田村外7ヵ村戸長役場となり、万瀬は横川村に属せり。明治22年2月26日自治会編成以来今日に至る。明治44年2月21日村治上見るべきもの少からざるの故を以て、内務省より表彰せらる。」

民俗調査は現在進行中であるが、事前の文献や2度の合同調査によると以下の点が歴史的に、民俗的に調査すべき視点であろうと思われる。今後『豊岡村誌』を中心とした文献を抑えつつ、聞き取り調査によって多方面から記録し、その生活文化を探っていきたい。

獅子ヶ鼻

敷地村岩室にある自然公園。天竜奥三河国定公園の区域内。春はサクラ、岩ツツジ、秋は紅葉が美しく山頂から太平洋、浜名湖が遠望され、眼科に天竜川の流れを望む。西に面して天高くそびえ

る巨大な岩が唐獅子に似ているのでその名があり、付近には八畳岩、鐘掛岩などが多く、変化に富む地形が見られる。

岩室廃寺

山岳寺院であった岩室廃寺は、現在、巨岩や窟が点在する獅子ヶ鼻公園内にあって、御堂跡とよばれている礎石建物跡、観音堂周辺の礎石群、心礎の残る塔跡、各種の行場とされる跡、礫の散乱する経塚群、石積みの方形盛土をもった塚墓を中心とする中世墳墓群などが確認されている。奈良時代から室町時代にかけての遺構で、その規模などから遠江国分寺や国府と深い関係をもった山寺であったといわれる。

銅鐸出土最東端

敷地駅をおりて南へ、第2東名高速道路の手前を西に400mほどいったところに、西の谷遺跡があった。現在は道路工事で姿を消している。3口の銅鐸が出土し、うち銅鐸1口(県の指定文化財)は、金属探知機などによってその存在が事前に確認され、調査された。日本における銅鐸出土の最東端に位置する。

大平の遠州大念仏

大念仏は、万瀬、大平、虫生、大楽地、合代島、社山、壱貫地、上神増、三家、松之木島の各集落に伝承された。しかし現在、虫生、万瀬、社山は

現在行われていない。歴史的には合代島が上神増に伝え、上神増は1947年に壱貫地に伝え、1950年には大楽地に伝えている。また三家は浜北市永島の大念仏を導入している。現在、大平、大楽地、合代島、壱貫地、上神増、三家、松之木島の7ヶ所の大念仏が磐田市の無形民俗文化財に指定されている。

虫生温泉

虫生の地は秋葉街道の道筋にあたっている。それは、袋井宿からの道筋で、上山梨で太田川を渡り、小国神社に参詣し、小国神社の裏山を越え、虫生に入る。虫生から峠を越え、下百古里、横川を出て、そこから光明山(光明寺)を經由して秋葉山に至る道筋であった。敷地川の最上流部にあたる虫生は、内山真竜の『遠江国風土記伝』によると「出湯 湿病を治す」とあり、寛政年間(1789~1800)には、湯治場としてにぎわっていたと知られている。

伊藤玄蕃

豊田郡敷地村にある野辺神社の神主であった。伊藤家は代々野辺神社の神主を務める家柄であった。1868年(慶応4)、有栖川宮熾仁親王を東征大総督として西郷隆盛らを参謀とする討幕軍に遠州報国隊が加わっていったが、そのときの遠州報国隊の一人であった。また彼は神葬祭を実施し神仏分離にこの地で取り組んだ人として記憶される。



写真1. 現在でも丁重に行われる盆行事



写真3. 敷地地区の合同民俗調査



写真2. 旧敷地村役場



写真4. 現在も残る茅葺民家(敷地)